

18 「帰省」

藤沢周平のエッセイ集「帰省」を読む。これまでもエッセイ集「周平独言」、「小説の周辺」を読んだ。藤沢周平のエッセイ集は、普段着の姿が垣間見えて読んでいてとても面白く安らぎを感じる。

彼は、山形師範学校を出て教員になるが、肺結核で東京東村山の病院に入院し手術。退院後は、業界新聞の記者として働きながら小説を書き始める。

業界新聞の記者として、いくつかの会社を渡り歩くのだが、記事を書く生活は彼に合っていたようだ。その間に小説を書きながら投稿を続けた。

1971年『溟い海』(くらい海)でオール讀物新人賞を受賞。この受賞のことを、次のように「帰省」に書いている。

『懸賞小説に応募するなどということは、よく言う砂浜で一本の針をさがすようなもので、ほとんど気休めといってもいい感じのものだった。

あてもなく応募原稿を書いているうちに、ある時突然に、まるで啓示でも受けたように小説の文章というものがわかったと思う日がきた。

そのとき書いた原稿「溟い海」は新人賞の最終候補に残り、そのことを知らせる編集者は、選考会の結果をどこに通知したらいいかと聞いた。私はそのころ勤め先から一時間半はかかる東久留米に住んでいたので、編集者が言う時間帯には通勤電車の中にいる。そこで東銀座にある勤め先で電話を受けることにした。

当時の雑誌をめくると、それは昭和46年4月5日の夜のことである。同僚が一人、二人と帰り、やがて事務所に残るのは社長と私の二人だけになった。社長は社内随一の働き者で、ほとんど毎晩残業をして帰るのである。私も恰好をつけるために、たまっている仕事を少し片づけながら、落ちつかない気持で電話を待った。

そして、やがて電話がきて私が受賞したと告げた。私は礼を言って電話を切ったあと、少しの間茫然と立っていたように思う。

長い間ののぞみがかなえられたにしては、あっけないという気がしていた。私が帰り仕度をしていると、社長も帰ると言い、外で軽く一杯やりませんかと誘った。社長は、怠け者の編集長が今夜は感心に残業をしたと思って、一杯おごる気になったのかも知れなかった。そのあとのことはほかのエッセイに書いたので省く。

私は一時間ほどして社長と別れ、新橋から電車に乗った。酔いと静かな喜びが身体を満たしていた。私はそのとき、少々たびれた文学青年が文壇の片隅に小さい椅子をもらっただけのことだと思ったのだが、その後のことを考えると、その夜はじつは私の人生の転機となった夜だったのである。』

この受賞をきっかけに、その後直木賞候補となり、翌年『暗殺の年輪』で直木賞受賞、時代小説作家として認められるようになった。

「帰省」に、直江兼続を主人公にした小説「密謀」で、取材漏れで冷や汗をかいたことを記している。小説を書くときは五万分の一地図を片手に、ひととおりは各地を取材して回る。上杉の拠点春日山城、直江兼続の与板城、本庄繁長の越後村上城址、...

しかし、取材したことがすべて小説に現われるわけではない。すべては小説の流れに左右されるわけ

で、たとえば、かなり時間をかけて調べ回った、関ヶ原の東西両軍の布陣あとなどは、小説の中にはほとんど描かれることがなくて終わった。

小説の流れから、はじめは書く予定がなかった新発田，五十公野（いじみの）両城の攻防戦を書くことにした。書く予定がなかったので、その北にある村上まで行きながら両城は取材していなかった。もう再び取材に行く時間はないので推測で書くしかなく、新発田城，五十公野城とも平城と想定して攻防戦を書いたのである。

その後気になって調べてみると山城だったので、そのことを密かに気に病んでいた。

ところがある日、羽越線特急で偶然明治大学の英文学者山崎昂一教授に会う。

彼は五十公野が生まれ故郷だといい、『密謀』を読みましたと言って名刺をくれた。

藤沢周平はそのあたりの事情を話し、おそろおそろ疑問点をただす。すると山崎教授はあっさりと「あれは丘の上にありますよね」と言った。取材して書かないのはいっこうにかまわないのだが、取材せずに書くことはこわいこと、、、という失敗談である。

なかなかうまく表現できないが、彼の文章表現はとても巧みでユーモアを漂わせ親しみを感じさせる。

(2 0 1 1 . 0 6 . 0 6)